

賢治の笑い 原子朗

宮沢賢治の作品に遍在するユーモアについては、いずれくわしく論じる予定が私にはあるので、ここでは、ささやかな紙幅を

利用して、その前がき程度のことを記しておくことにする。遍在する、といっても、それは作品の一特色、作者の資質の一側面として、たまたま遍在しているというのではなくて、もっと重要な、作品成立のカギとしてそれは作用しており、賢治作品のユ

ーモアないし笑いについて論じるとは、すなわち彼の芸術と生活について論じることになる、と私は考えている。

詩人宮沢賢治は、なぜ童話を書いたか？

ということとは愚問なのだろうか、誰もそのことについていおうとしない。彼の場合、詩人が小説を書き、あるいは小説家がかつて詩を書いたのとは、事情がちがう。だから

ら、そのことは大事な問題点だと私は考えている。

伊藤整の「若い詩人の肖像」では「私

はせっせと図書館で谷崎や犀星、芥川、志賀、広津、菊池、宇野、春夫、武者小路ら当時新進の有力作家たちの小説を読みふけりながら、犀星や春夫ら詩人たちが「だからした散文を書いて小説家の仲間入りをするのは墮落ではないか」と軽蔑し、「彼

等小説家の誰よりも詩人萩原朔太郎が偉い、という印象を消すことは、どうしても出来なかつた」とある。また別のところでは「春と修羅」に感激した民衆詩派のある

詩人が、賢治を訪ねて行って面会謝絶をくらった、というゴシップ記事を読んで「私は宮沢賢治を立派だと思ひ、自分の顔が赤らむのを感じた」とある。

この前者の時期は一九二二年（大正十一年）頃にあたり、あたかも賢治が『春と修羅』の詩作をはじめた頃とかさなる（童話はすでに多く書かれていたが）。そして小説（家）を軽蔑し、朔太郎のほうがよほど偉いと感じていた点では、賢治もまったく同様であつたことが、ほぼ確実に推定できる。『月に吠える』に彼も少なからず刺激

と鼓舞を受けていたし、上京して上野図書館に通い「毎日百人位の人が『小説の作り方』或は『創作への道』といふやうな本を借り」ているのを横目で見て「小説ぐらゐ雑作ないものはありませんからな」と友人に書き送つたりしている。

かといつて彼には△集中▽と△拡散▽の内的な欲求が最初からあつて、詩的集中としての心象風景の造型をはかる反面、自我の爆発的拡散の欲求にも耐えられなかつた。というより社会にかかつてゆく精神の運動の欲求に絶えずつき動かされていった。そこに宗教的作用をみとめることもできなわけだが、要するに後者のはたらきにおいて彼の散文や劇や実践活動を見ること

ができる。文学的結実としては、むしろ童話が最たるものであった。フィクションの最たる童話、詩の外発的変型、あるいは散文的ヴァリエーションとしての彼の詩的童話には「だからだらし小説」を蔑視する自信と優越と高貴とが底のほうで息づいている。そこで機知や洒落や地口、皮肉や諷刺等々をふくめた滑稽・可笑味の要素、すなわち読者にとつては笑いの要素が問題になつてくるわけだ。

ベルグソンにまつまでもなく、笑いは湿つた情緒からは自由な、もともと社会に發生する理知の産物である。本質的に孤独は笑いをもち得ない。孤独が社会にはたらくかけ、あるいは関係をもつとき、孤独や社会のもつこわばりへの罰として、社会が、あるいは孤独みずからが、感じる笑いは開放的な精神の現象である。「いかりのにがさまた青さ／四月の気層のひかりの底を／睡しはぎしりゆききする／おれはひとり／の修羅なのだ」とうたう詩人が、一方で果敢に社会にまじわろうとするとき、怒りを情緒から開放し、暗い虚無の深淵へ傾斜してゆく集中的な精神の運動をあぶなく支

え、劇的な調和を保つものが笑いにほかならぬ。

賢治の笑いは童話や劇において豊かである。彼の詩においても私たちは笑いをもつが、それは題材が社会的に拡散してゆく、おおむね「春と修羅」第二集以後においてである。そして笑いを味わうとき、私たちはその作品に示された作者の怒りや悲しみの深さを思い知らされる。ことに彼の童話

の暗さ、賢治童話を一読した人には思い出していただけよう、処女作「蜘蛛となめくちと狸」「雙子の星」（いずれも大正七年）以下、擬人化された動物の社会も、人間社会も、食うか食われるか、深刻な修羅たちの織りなす地獄絵といった話題が多い。あるいは透視された虚無の世界。それをそう感じさせず、馬鹿の一つ覚えのように賢治の童話は健康的で明るい、宗教的だ、とい

わせるほどに明るく輝やかしているものは、みがかれた文脈の音楽的諧和の作風もさることながら、まさに笑い、しかもたくまざるおどかな笑いののはたらきにはかならぬ。直接笑いを感ぜさせない文脈にも、いわゆるユーモアの要素は遍在している。

彼の作品世界は、そんなに素朴に明るいものでは決してない。そして読者を笑わせ、あるいは明ると感ぜさせるのは、暗さが軽微だからではなくて、おかしきから、ユーモアがあるから、その暗さが軽微なものとなる。

ユーモアを単に作者の資質とか、宗教的な愛のあらわれと解するのは、扁平な概念的な思考である。むしろユーモアによって現実能耐え、精神の運動の秘密の軌跡としての文体の行為性によって、賢治は宗教と覇をきそい、それに迫ろうとしたのである。宗教から貰ってきたのではなく、みずからの文体の行為を宗教たらしめようとしたのである。その文体の行為性ということ

をぬきにしては、彼のユーモアは考えられない。ちなみに伊藤整のユーモアは、近代的な自己防衛の手段として計算され、鍛られた武器であった。賢治にはそれはない。もつとアルカイックな、排斥の要素の少ない、おどかなものである。実はそこからまた問題はひろがってゆく。